

昨年リオのオリンピックでは柔道やそれ以外の競技で様々な感動的なシーンを見ることができました。一方、柔道男子 100 kg 超級の試合のように何となく納得いかない感じの審判や結果にもやもやした試合も他競技も含めていくつかありました。しかし、結果の如何にかかわらず私にはすべての選手がとても輝いて見えました。なぜそのような輝きを感じるのでしょうか。20年以上前に「中島義道」という哲学者が毎日新聞に素晴らしいコラムを書かれています。「理不尽とオリンピック」という題でしたが柔道に置き換えて、そのまま一部引用させてもらいます。

『すべての選手は勝ちたい。何年もの血の滲むような練習の成果は、試合の数分に賭けられる。あっという間に一本取られる。「もし～ならば、もし～でなければ」という思いを振り切ることはできない。しかし、結果を動かせないことも痛いほどわかるのだ。長い苦しい練習の成果を「出し切れた」のかどうか、誰にも、本人にもわからない。すべてを偶然と言って片づけるには余りに重い。すべてが必然と言うには余りにも不可解である。我々は実力という雑駁（雑然として統一されてないもの）なものを信じる振りをする。それは勝つ方向に導く潜在的な力である。しかし、いかにこの力が真わっていようと最終的には「やってみなければわからない」ことも肚の底から知っている。こうして、我々は巨大な理不尽を前に身を竦ませ、だからこそその残酷さの中で結果のみを受け入れることを心に誓って戦う選手たちの潔さに感動するのだ。なぜか、なぜなら人生とはまさにこうした理不尽な戦いだからだ。能力には甚だしい個人差がある。生まれた時から、各人の境遇は残酷なほど不平等である。その上それぞれの人生は絶え間なく偶然に翻弄され続ける。生きることはこれら理不尽をグイと呑み込むことである。すべての選手は輝いて見える。理不尽を熟知しながらも、その中で必死に戦うという姿勢が、人生と重ね合わせて我々の感動を呼びおこすからではなかろうか。』

本年も日々柔道に取り組んでいる大阪の高校生が理不尽をグイと呑み込んで必死に戦う姿を見ることができると思うと今から期待で胸が高鳴ります。そしてこの純粋な戦いは柔道の強い弱いではなく、みなさんを人間として大きく成長させてくれるものと思っています。

「勝ってその勝ちに驕ることなく、負けてその負けに屈することなく、安きに在って油断することなく、危うきにあつて恐ることなく、唯々一筋の道を踏み行け」

柔道創始者 嘉納治五郎先生の教えの一つです。前述の中島氏が伝えようとしていることと重なる部分があるのではないのでしょうか。柔道の最終目的は世の中の役に立つ人間になることです。高校生の皆さんが柔道を通して、理不尽に屈することない強い精神と肉体を得られることを願って巻頭の挨拶といたします。